

琉球大学学術リポジトリ

コロナ禍を経た教育・学習活動の変化－琉球大学 1 年次学生調査報告（2019～2022年度）－

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2023-05-02 キーワード (Ja): 学生調査, コロナ禍, 大学IRコンソーシアム キーワード (En): 作成者: 天野, 智水 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019761

コロナ禍を経た教育・学習活動の変化 —琉球大学1年次学生調査報告（2019～2022年度）—

天野 智水
琉球大学グローバル教育支援機構

要 旨

コロナ禍が本学学生の学習行動や授業経験にどのような影響を及ぼしたのかを把握するため、4か年にわたる各年度1年生調査の分析を行った。その結果、いったんは下がっていた教育全体に対する満足度や学生に対する教員からのフィードバック頻度は、コロナ前の水準を上回るまでに向上していた。一方、コロナ禍を契機に増加していた授業時間外学習時間は22年度には減少に転じた。部活動や同窓会、そしてアルバイトや仕事に費やす時間がコロナ以前の程度に戻ったためだろう。それでも、19年度水準を上回っているため、これが維持向上されることを期待したい。

キーワード

学生調査, コロナ禍, 大学IRコンソーシアム

1 はじめに

コロナ禍が本学学生の学習行動や授業経験にどのような影響を及ぼしたのかを把握するため、当機構大学教育支援部門は1年次を対象とした質問紙調査結果を2020年度と2021年度にWebページ (<https://www.u-ryukyu.ac.jp/faculty/globaleducationinstitute/>) で公表してきた。このうちコロナ禍2年目にあたる21年度調査結果からは、コロナ禍前の19年度の状況に復調し、さらにはより望ましい教育・学習行動もみられたことを報告した。これを踏襲し3年目となる2022年度でもこうした状況が維持されているのか、従来Web上での公表のみでページ更新に伴う記録消失が懸念されることから、今般本誌にて報告することとした。なお、同調査は例年10月に実施しており、本学独自の質問項目ほか大学 IR コンソーシアム共通調査の質問項目の一部を使用して実施している。4年にわたる回答者数は5,072名、回収率は8割程度と高く、ご協力いただいた学生の皆さんに感謝申し上げます。また、データセットは教育支援課にて準備いただいた。

2 本学教育に対する満足度

学習行動や授業経験の詳細を確認する前に、「共通教育全体」と「学部専門教育全体」に対する評価（満足度）を、それぞれ図1と図2で確認しておこう。どちらも20年度1年生の評価が

落ち込んでいたものが復調し、さらにはコロナ前年の19年度1年生評価を上回る結果となっている状況が21年度1年生評価に続き22年度1年生評価でも確認できた。コロナ1年目の不調をもたらした、①体験的学習や学生同士の議論の機会が対面授業機会の減少とともに失われたこと、②これを補うための授業課題が孤立した状態で遂行するには過多であったこと、③それにもかかわらず教員からのフィードバックが従来程度の頻度にとどまっていたこと、への対策が功を奏したと考えられる。そこで以下、その様子を具体的に確認しよう。

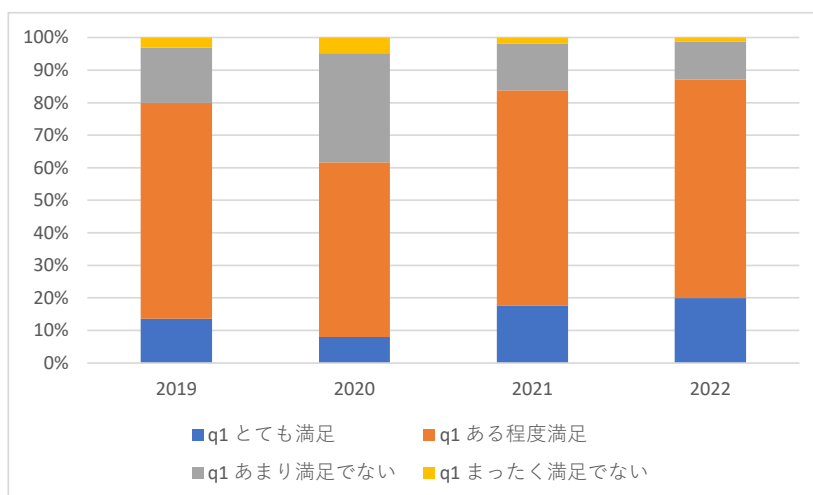


図 1 共通教育満足度

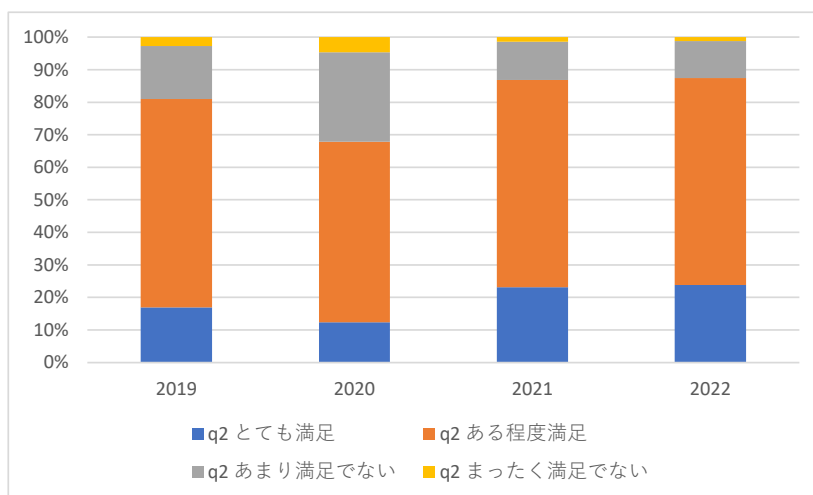


図 2 専門教育満足度

3 授業での経験

実験、実習、フィールドワークなどの体験的な学びの機会は、今般22年度はついにコロナ以前の程度にまで回復した(図3)。学生同士が議論する機会についてもコロナ前を上回るほどの頻度となった(図4)。小テストやレポートが課される機会は20年度から漸減傾向にあるが19

年度は上回る（図5）。これが適正な負荷であるかは判断しがたいが、それだけに注視すべきは教員からのフィードバックである。そこで、教員が提出物に添削やコメントをつけて返却する頻度を確認すると21年度に続き22年度はさらに増加しており、学習条件の維持向上がみられた（図6）。

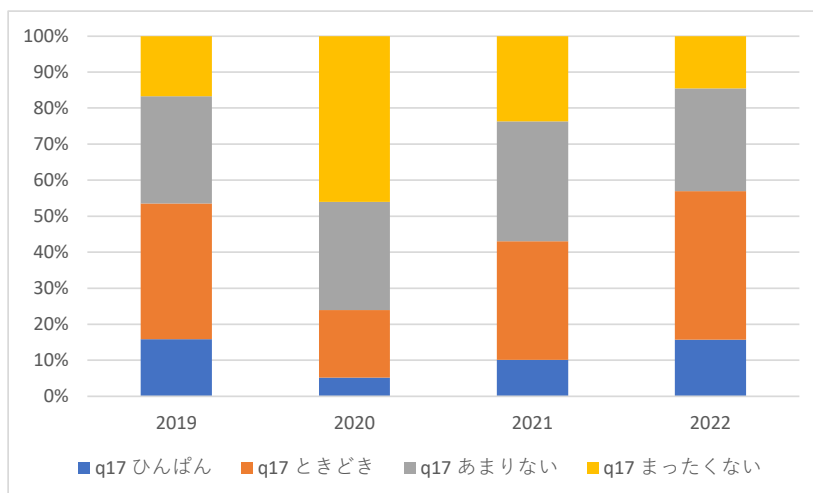


図 3 実験等の体験的学習

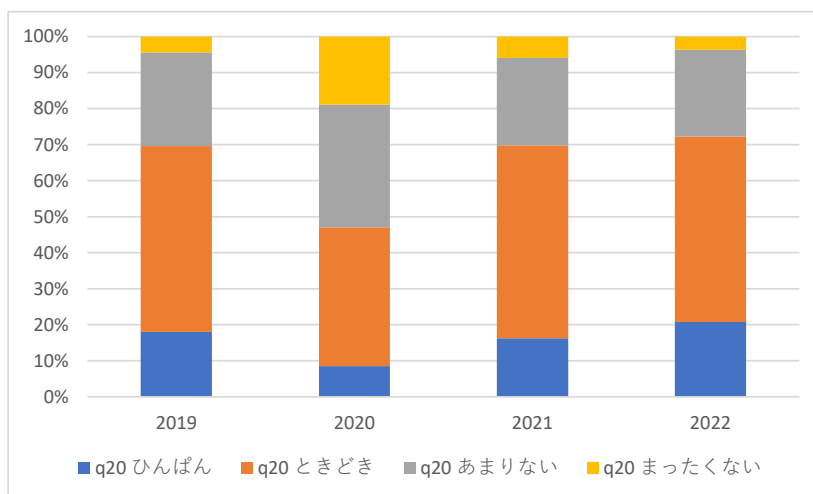


図 4 授業中に学生同士が議論する

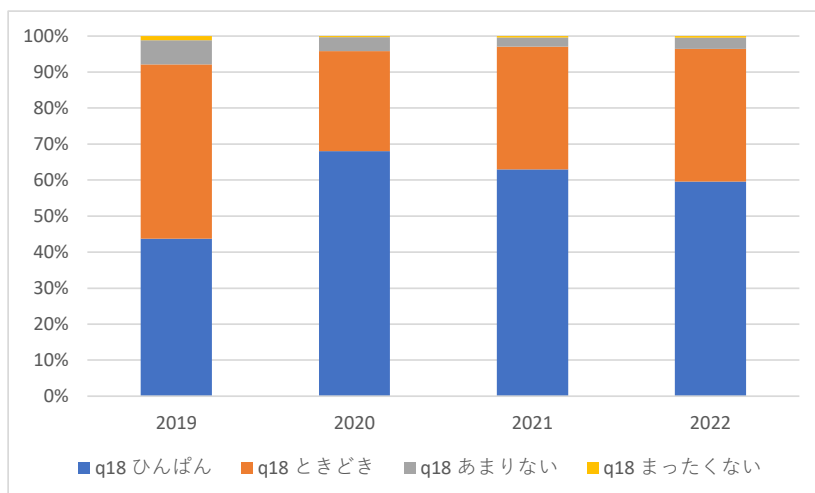


図 5 小テストやレポートが課される機会

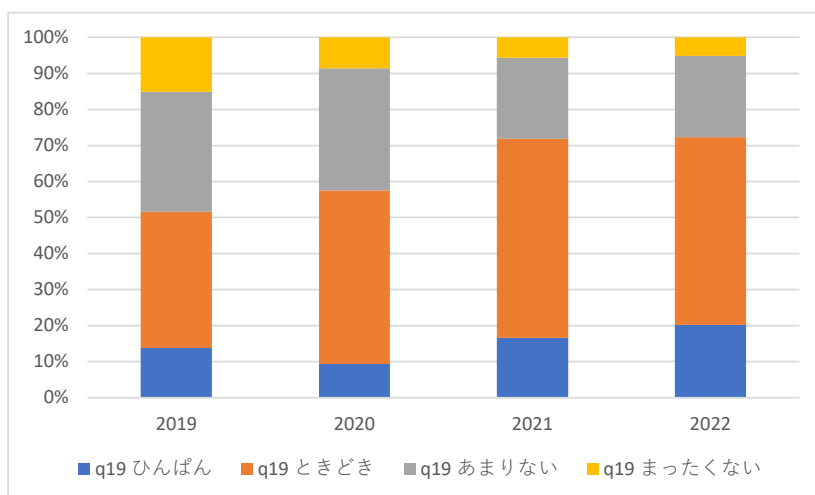


図 6 教員が提出物にコメントをつけて返却

4 学習経験

授業課題のために図書館の資料を利用した頻度は、19年度には及ばないが順調に回復している（図7）。一方で、これに呼応するかのようにWeb上の情報を利用した頻度は22年度にはやや減少していた（図8）。また、遠隔授業の効用というべき授業を欠席した頻度の減少は、22年度にはほとんどみられなくなった（図9）。教職員に学習に関する相談をした、あるいは学内の学習支援室を利用した頻度については、22年度には19年度も上回るほどに増加した（図10）。積極的な学習資源の活用は望ましいことだが、学習に困難を感じる学生が増加したとすれば懸念事項となる。けれども、そうした懸念を抱くべき理由は見当たらず、ここはポジティブに理解したい。

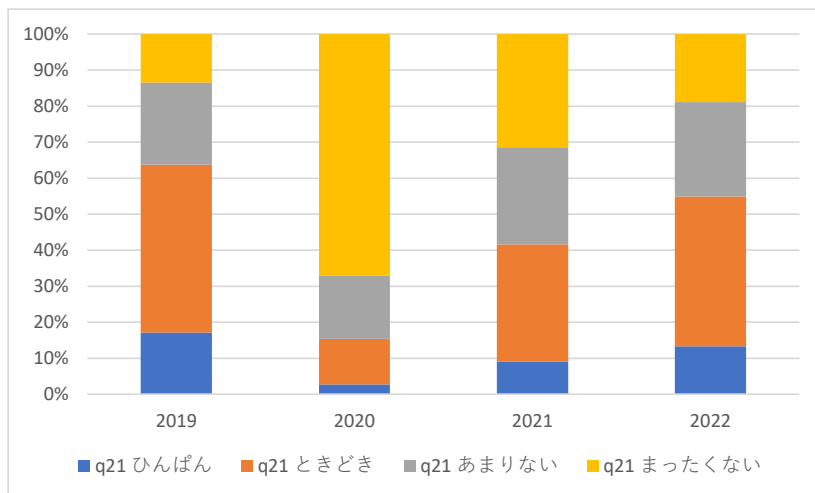


図 7 図書館の資料を利用した

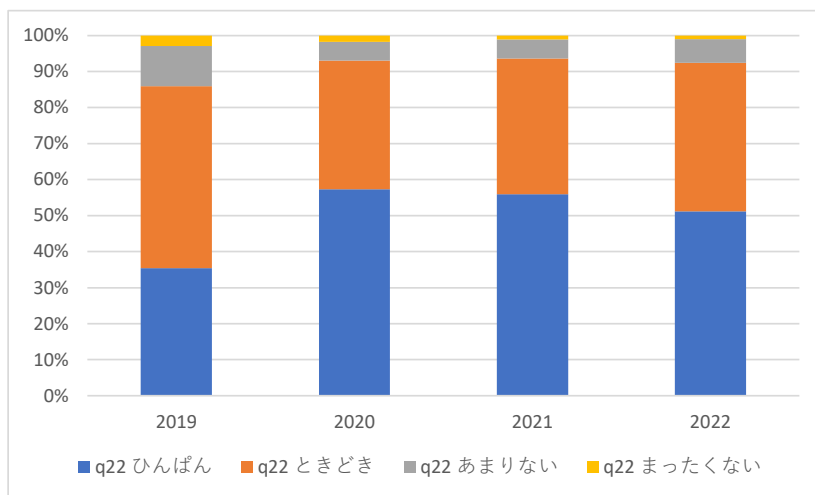


図 8 Web 上の情報を利用した

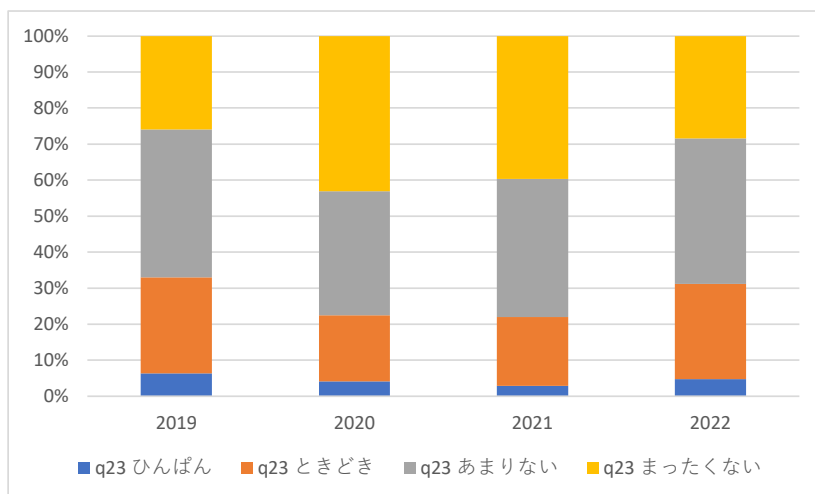


図 9 授業を欠席した

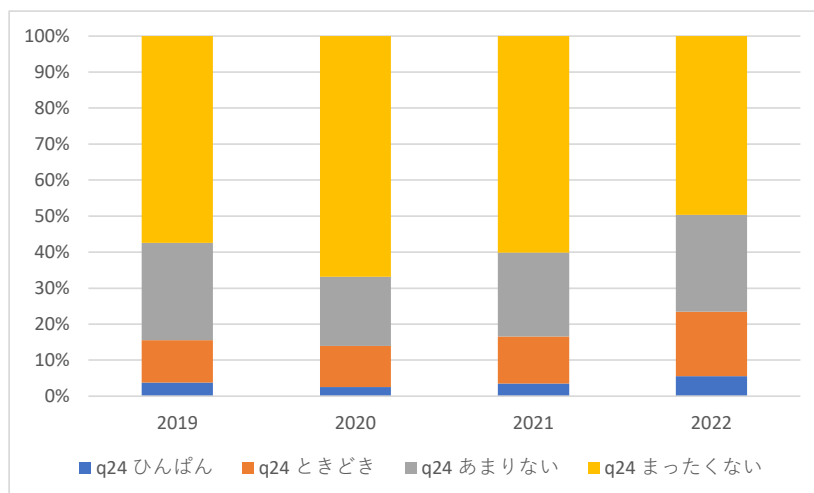


図 10 学習支援をうけた

5 一週間の活動時間

本調査では一週間あたりどのくらいの時間をどのような活動に費やしたかを尋ねている。回答は「全然ない」「1時間未満」「1～2時間」「3～5時間」「6～10時間」「11～15時間」「16～20時間」「20時間以上」の8つの選択肢から選ぶもので、「全然ない」は0時間、「20時間以上」は20時間、他の選択肢にはそれぞれの中間の時間をあてはめて平均値と標準偏差を算出した。まずは表1により学習時間を確認しよう。授業や実験に出た時間については、20年度の落ち込みから回復している状況が22年度も続いているが、19年度よりは依然としてやや少ない。授業時間外に授業課題や予復習をする時間は、コロナ禍を契機に増加したことからこれが定着することを期待したが、22年度は減少に転じた。けれども、19年度を上回る状況は続いている。授業に関連しない授業時間外学習に変化はなく、授業時間外に教員と面談する時間については回復傾向にあった。

次に学習以外の活動について表2で確認しよう。部活動や同好会の時間は19年度並みにすっかり回復した。アルバイトや仕事に費やした時間は21年度にあっても回復していなかったが、22年度になって元の水準に戻った。マンガを除く読書の時間に変化はなく、趣味活動の時間はコロナ以前よりも増加した状態が22年度も維持されていた。

表 1 一週間の学習時間

		平均値	標準偏差
授業や実験	2019	13.35	6.292
	2020	9.98	6.272
	2021	12.72	6.235
	2022	12.17	6.326
授業時間外学習 (授業課題予復習)	2019	4.13	4.350
	2020	6.91	5.863
	2021	6.19	5.239
	2022	5.45	4.946
授業時間外学習 (授業に関連しない学習)	2019	1.98	3.727
	2020	2.13	3.735
	2021	2.22	3.902
	2022	2.26	3.863
教員と面談	2019	0.76	2.724
	2020	0.30	1.411
	2021	0.41	2.030
	2022	0.60	2.264

表 2 その他の活動時間

		平均値	標準偏差
部活動や同好会	2019	3.01	4.985
	2020	1.62	3.697
	2021	1.80	3.792
	2022	2.97	4.968
アルバイト, 仕事	2019	7.35	7.410
	2020	6.11	7.114
	2021	5.81	7.033
	2022	7.34	7.520
読書 (マンガ除く)	2019	1.83	3.633
	2020	1.68	3.383
	2021	1.76	3.600
	2022	1.88	3.630
趣味活動	2019	7.02	6.466
	2020	7.78	6.446
	2021	8.48	6.837
	2022	8.49	7.035

4 おわりに

前回報告でも言及したように本学はコロナ禍に伴う教育活動の混乱を收拾すべく、①集合対面授業の再開、②Web会議システムの積極的活用、および③学生へのフィードバック強化に努

めてきた。結果的に教育全体に対する満足度や学生に対する教員からのフィードバック頻度は、コロナ前の水準を上回る状況が続いていた。否応なくICTの活用にとりわけ教員が通じることとなったことが功を奏したかもしれない。一方、コロナ禍を契機とした授業時間外学習時間の増加はコロナ終息後も定着することが期待されたが、22年度には減少に転じた。部活動や同窓会、そしてアルバイトや仕事に費やす時間が増加したためだろう。それでも、19年度水準を上回っているの、これが維持向上されることを期待したい。なお、大きな混乱に直面した20年度入学者へのフォローアップ調査が必要であるところ、本誌特集論文をご覧ください。